コラム

外部の授業評価による負の前兆

2005．８月

８月９日の第９回「子どもの学びを創る会」では，午前と午後を含め８０人の先生方の参加をいただきました。改めて感謝申し上げます。防府市立華浦小学校 村田辰明先生，山口県教育会 田中淳夫先生から，子どもの学びのとらえ方などの教師の姿勢について教えていただきました。両先生の子どもに対する愛情はもちろん，子ども観や学習観には学ぶことがたくさんありました。明日からの授業に生かしていただければ幸甚です。

●

ある研修会が終わりに近づいていた時，「先生方の学校では，授業評価されていますか？されていたら，感想を聞かせてください。」という主旨の質問があった。参加者のうち半数くらいが実施に挙手され，今後予定している学校も数校あった。確実に授業評価が実施されてきているようだが，特に外部による授業評価について，問題や抵抗があるように感じた。

授業批判や担任批判と解される結果に意欲喪失寸前の教師もいるようだ。中には，その時だけ評価項目に合わせた授業をするという教師もいるとか。「また授業を評価される日が来ると思うと憂鬱になる。」「なぜ，授業評価なのか尋ねられる雰囲気が校内にない。」などの話をこれまでにも聞いたことがある。学校の信頼を得るために，教職員にこのような現象や気持ちが生まれてくるのは絶対にまずい。

ここで問題にしたいのは，授業評価の手続きが内側に開かれていることが前提になっているかである。まず，「なぜ，授業評価なのか。」に丁寧に答えることが重要ではないか。教育委員会が授業評価の導入を言っているからするという理由だけでは寂しすぎるし，学校の自主性や自立性から程遠い理由である。教育界が，学校評価や授業評価，教員評価など評価の時代に入ってきているのもわかる。しかし，自校の子どもたちのための授業を少しでもよくしようとする気持ちがないところには，授業評価は負の所産になるしかない。自校の授業評価の導入の際には，教職員に授業改善への気概をもたせ，授業評価の手順から教職員全員で合意形成を図りながら，協同体制をとるという内側にまず開くことを念頭におかなければいけない。だれが念頭におくのか。それは，校長であり教頭である。

ある時のある授業をわずかな時間に決まった項目で評価（評定）した結果に一喜一憂する教職員の姿に，明日の子どもたちの学びを期待し楽しみする余裕はない。授業評価はもっと多様であるべきである。また，授業には教師の理念・信念が織り込まれている。授業評価をする前に，教師は学習観についてしっかり語り合いたいものである。授業評価の負の前兆が起きる前に。

（芝）